

前期日程

令和7年度入学試験問題（前期日程）

国 語

（教育学部）

—— 解答上の注意事項 ——

- 1 「解答始め」の合図があるまで問題を見てはならない。
- 2 問題冊子1冊と解答紙2枚がある。
- 3 問題は3問ある。（すべての問題に解答すること。）
- 4 問題の解答は、解答紙の所定の解答欄に記入すること。
- 5 問題冊子は持ち帰ること。

一 次の文章をよく読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、原文を一部改めたところがある。)(50点)

今日の日本社会で友情・友人関係と呼ばれるものはどのような形をとっているか。これについて歴史社会学の観点から見通しのよい像を描き出しているのが木村直恵<sup>\*1</sup>である。木村は、明治期に「青年」というカテゴリーがどのように成立していくのかを論じているのだが、それは同時に「青年」の「友情」の成立の過程でもあった。

そこで形成される友情は「相互に一点の曇りもなくわかりあえている」という確信と信頼の関係<sup>A</sup>、いわば相互の直感的透明性とでもいうべきものだ。

つまりそこにおいて期待されているのは、議論に議論を重ね、誤解に誤解を重ね、妥協や歩み寄りをくり返した末にやっと互いに理解し合えるような、いわば他者としての相手であるよりは、むしろ直感的に相手のすべてを即座に把握でき、また相手も自分のことを、なんの変形も歪曲<sup>わい</sup>もなく有りのままのかたちで受け止めていると確信されるような友なのである。<sup>\*2</sup>

このような見方は、さまざまな変容を経ながらも、今もなお友情の基本的な像のひとつであろう。

木村の議論において指摘されているもう一つの重要な点は、このような友情の賭け金となるわかりあいの対象たる「内面」自体が、このような友情の成立と相即的<sup>\*3</sup>に構成されるものだということだ。

「真友」という理想的な理解者が設定されることによって、理解されることへの欲望が掻き立てられ、そのようにして設定された布置にしたがって内部に開かれる空間に、他者に理解されるべき対象としての「内面」が宿るのである。<sup>\*4</sup>

内面とはあらかじめ存在するものではない。「真友」を求めようとする運動がそのアテサキ<sup>A</sup>として人びとの内部に仮構してしまふ空間である。したがって直感的透明性としての友人<sup>A</sup>について論じることが、このような「内面」について論じることでもある。

一九九〇年代に展開された希薄化論をめぐる論争について理解する際にも「内面」はひとつの鍵となる。若者の友人関係あるいは人間関係一般が希薄化しつつあるという論評が繰り返される中、橋元良明<sup>\*5</sup>はそれをある種の錯誤として理解しようのではないかと指摘した。誤解を促す要因を橋元はいくつかあげているのだが、ここで注目したいのは、観察者と観察対象との距離に関わるものだ。若者論を語るのはいざしばば大学教員であり、彼らは自分と学生との関係を無意識のうちに一般化してしまっているのではないかと橋元は指摘する。大学の進学率の上昇などによって学生数が増加するとともにその性質も変化し、学生と教員との距離は過去三〇年間大きく変化している。一般的にいえばこの変化は、両者の距離を広げるものであり、その距離を大学教員は若者同士の人間関係の上に投影しているのではないかというのが橋元の見立てだ。この見立ては、内面相互の距離の誤

認、あるいは距離をはかるための基準点の誤認を指摘するものとみることが出来る。

この理解を一步進めたのが北田暁大<sup>\*6</sup>だ。北田は、NHK放送文化研究所のデータを用いて、人間関係が希薄化しているのはむしろ中高年であることを示した。彼らは自分たちの人間関係の希薄化を若者の上に投影しているのではないか、というのが北田の見立てである。これもまた距離の取り違えという意味で内面の距離における誤認を指摘するものとみることが出来る。

これに対して、距離を成り立たせる構図自体に疑問を投げかけるのが辻大介<sup>\*7</sup>である。内面はそれへの到達がその人の全体性を透明に了解しうるための何かとして仮構されたものであった。内面がある深みを示すものだとして、その深みは一種の虚焦点<sup>\*8</sup>を有しており、この虚焦点によって内面同士にある距離が測られることにもなる。だがこの虚焦点によって開かれる遠近法自体が成り立たなくなっているとしたらどうか。例えば、虚焦点が複数あり通常の遠近法が成り立たなくなっているとしたら。辻は、若者の自己が複数の核を持ち、相手によって、場面によって異なった核が関係を結んでいると考える。どの核もそれ自体としてはその人の全体性を表示することはできないので、関係はどうしても部分的なものとなる。内面の共有をもって近さと考える視点からすると、部分的な関係は浅いものに見えるだろう。辻は、このように関係の文脈ごとに複数の自己が切り替えられていくコミュニケーションのあり方を「フリッパー」と表現した。若者の人間関係が希薄に見えるとしたら、希薄さを測るために用いられている遠近法が実態から乖離<sup>か</sup>しているから、ということになる。

浅野の議論もまた同じ点に照準している。すなわち、いわゆる「深い」友人関係と「浅い」友人関係のほかに部分的ではあるが深い関係があることを浅野は調査のデータから示唆している。そこで「状況志向的」と形容した友人関係のあり方は辻の「フリッパー」と重なり合うものだ。両者を合わせてここでは「使い分け志向」と呼んでおくことにしよう。

これらの議論は、友人関係の希薄化論に対して、友情の遠近法における測定の誤りや、遠近法<sup>B</sup>それ自体の問い直しをもって批判的に応じるものであった。希薄化といってもその測る基準や測る対象を取り違えている、というのが前者であり、実際に進行しているのは希薄化ではなく「使い分け」化であるというのが後者である。

他方で、フリッパー的なあるいは状況志向的な友人関係の広がりとは別に、それでもやはり「希薄」と呼ぶべき関係が若者の間に広がっているのではないかと指摘もなされてきた。福重清<sup>\*9</sup>は、二〇〇二年に行われた若者調査の結果から、互いに内面を開示し合うという意味での「深さ」が後退している可能性を示唆した。さらに彼は二〇一二年、二〇二二年の調査データを比較し、友人数の減少、ひとりであることを好む志向の高まり、コミュニケーションへの消極性の高まりなどの傾向を指摘している。

以上の整理を踏まえて、若者の友人関係が今日どのようなあり方をしていくのか、調査データを用いて確認してみよう。用いるのは青少年研究会が一九九二年から一〇年ごとに行っている都市部若者の生活と意識についての調査である<sup>\*10</sup>。

この調査はもともとは都市部の若者を対象に行われてきたものだが、

二〇一二年および二〇二二年には補足調査として三〇代から五〇代を対象にした調査も並行して行った。そのため部分的にはあるが、各世代の中年にいたるまでの変化や、中年における世代間の違いをみる事ができる。

一九九二年から二〇二二年にかけて四回行われた調査において、友人関係について以下のような文が用いられた。ただし、回によっては用いられなかった質問もあるため、それが用いられた調査年を括弧内に示す。

**拡張志向** 友だちをたくさん作るように心がけている(二〇〇二年、二〇二二年、二〇二三年)

**あつさり志向** 人との関係はあつさりしていて、お互いに深入りしない(二九九二年、二〇〇二年、二〇一二年、二〇二三年)

**話し合い志向** 友だちと意見が合わなかったときには、納得がいくまで話し合いをする(二〇〇二年、二〇一二年、二〇二三年)

**ひとり志向** 友だちといるより、ひとりであるほうが気持ちが落ち着く(二九九二年、二〇〇二年、二〇一二年、二〇二三年)

**使い分け志向** 遊ぶ内容によって一緒に遊ぶ友だちを使い分けている(二〇〇二年、二〇一二年、二〇二三年)

以下、回答者を一〇歳ごとにグループ化して世代とみなすことにする。調査時点との関連でいうと以下の五つの世代が含まれる。<sup>\*11</sup> イメージを作りやすくするために、しばしば用いられる世代名称によって呼ぶことにする。

**新人類世代** (一九六三—一九七二年生まれ)・一九九二年調査時に二〇代

**団塊ジュニア世代** (一九七三—一九八二年生まれ)・一九九二年調査時に二〇代

**ミレニアル世代** (一九八三—一九九二年生まれ)・二〇〇二年調査時に一〇代

**Z世代前半** (一九九三—二〇〇二年生まれ)・二〇一二年調査時に一〇代

**Z世代後半** (二〇〇三—二〇二二年生まれ)・二〇二二年調査時に一〇代

このように世代を分けただうえで、世代間の違いを検討していくのだが、その際に注意すべきことがある。それは比較のためには年齢をそろえなければならぬということだ。例えば、二〇二二年の調査を用いてZ世代後半(一〇代)と団塊ジュニア世代(四〇代)を比較することはあまり適切ではない。何らかの違いが見出されたとしても、それが世代(団塊ジュニア世代とZ世代後半)によるものなのか年齢(一〇代と四〇代)によるもののかはつきりしないからだ。これははつきりさせるためには同じ年齢層で世代を比較する必要がある。例えば団塊ジュニア世代が一〇代だったときとZ世代後半が一〇代だったときとを比較する、というように。

まず「友だちをたくさん作るように心がけている」という項目からみていこう。一〇代においては各世代に違いがないものの、二〇代、三〇代、四〇代の各年齢層において新しい世代の方が否定的である。つまり友人関係の拡張志向はあとに来る世代ほど低くなるということだ。そしてこれは中年層においてもみられる傾向である。

次に「友人との関係はあつさりしていて、お互いに深入りしない」はどうか。有意な違いが見られたのは一〇代と二〇代においてのみで、いずれも新しい世代ほど **カ** である。つまり、あつさり志向はあとに世代ほど

高くなり、しかもそれは若者においてのみみられる傾向である。

第三に「友だちと意見が合わなかったときには、納得がいくまで話し合  
いをする」について。一〇代から四〇代までのすべての年齢層において新  
しい世代ほど「キ」な傾向を示している。話し合い志向はあとの世代ほ  
ど低くなり、その傾向は全年齢層にみられる。

第四に「友だちといるより、ひとりであるほうが気持ちが落ち着く」につ  
いて。一〇代、二〇代において新しい世代ほど肯定的である。ただし中高  
年についてはこの質問が尋ねられておらず、この傾向が中高年齢におい  
ても見られるかどうか判断ができない。そのような限定つきではあるが、ひ  
とり志向はあとの世代ほど高くなる。

最後に「遊ぶ内容によって一緒に遊ぶ友だちを使い分けている」。二〇代  
においてのみ新しい世代ほど「ク」である。他の年齢層においてはその  
ような有意な違いは見出されない。

全体としてみると、拡張志向や話し合い志向が低下したのに対し、あつ  
さり志向、ひとり志向、使い分け志向が高まっているとみることができ  
る。とすると、かつて批判された希薄化論がやはり正しかったということ  
であろうか。ある程度はそのとおりである。ただし以下の点に注意すべき  
である。

第一に、使い分け志向が二〇代においてのみ高まっているという点。若  
者の人間関係は「イゼン」として使い分け志向によって（も）特徴づけられると  
いうべきである。第二に、あつさり志向の上昇が若者においてみられるこ  
とからこの点で若者の友人関係の希薄化が示唆されるものの、拡張志向や  
話し合い志向の低下はすべての年齢層にみられる。この点でそれは若者の

特徴というよりは全体的な傾向である。他方、ひとり志向は若者において  
みられるが、中高年齢の動向が不明であるため、若者の特徴といえるかど  
うかはまだわからないというべきであろう。

この点をふまえて整理すると、次のようなことがいえる。第一に、あつ  
さり志向、ひとり志向の上昇や拡張志向、話し合い志向の低下を希薄化と  
みなすならば、それはたしかに進んでいる。つまり、友人関係の使い分け  
という作法の広まりが希薄化のように見えているだけ、という（筆者自身  
も取っていた）遠近法的な錯誤による説明は現時点では成り立たない。第  
二に、他方で使い分け志向は二〇代で上昇しており、希薄化の進行とは別  
に若者の友人関係の特徴であり続けている。第三に、進行している希薄化  
は若者の友人関係の特徴というよりは、中高年まで含めてより広くみられ  
る動向である。この点に関する限り遠近法的な錯誤は今も残っているとい  
えるかもしれない。というのも、若者の友人関係の希薄化について中高年  
の人びとが語る際に（「ケ」が明らかにしたように）自分たちの関係の希  
薄化が忘れられているように思えるからだ。しかも、若者の希薄化が（単  
なる投影ではなく）実際に起っている事態であることは、中高年のこの忘  
却をより深いものにする可能性もある。

近代社会が二〇世紀後半に転換点を迎えたと考える一群の社会学者がい  
る。「第二の近代」論とも「再帰的近代」論とも呼ばれるそのような「リ  
リュウ」を代表するひとりジグムント・バウマンは、その転換が親密性のあ  
り方にもおよんでいるとみる。すなわち、近代初頭に想定されていた親密  
性のあり方が、それを支えていた諸条件の変容によって失調していくとい

うのである。彼がしばしば論じるのは恋愛や結婚についてであるが、その議論は友情についても妥当するものと思われる。

パウマンの議論にしたがえば、愛情も友情もかつてのようなたしかさを失い、流動的で断片的なものになる。関係のあり方は個々人の選択に委ねられるようになるがゆえにきわめて儂く脆いものとなる。「関係 (relationships)」という言葉は暗黙のうちに持続への予期を含んでいるのだが、それは今やいつでも取り消し可能な「接続 (connections)」<sup>\*13</sup> という語に置き換えられつつある、とパウマンはいう。この見立ては前節でみてきたような若者の友人関係のあり方とも対応しているように思えることをまず指摘しておく。

そこから生じる帰結の一つとしてパウマンが指摘しているのは、親密性の喪失を埋め合わせるための「美的コミュニティ」の登場である。美的コミュニティとは、ときに「単発的に繰り返されるお祭りイベントを中心に形づくられ」、「ポップ・フェスティバル、サッカーの試合、流行に乗り、話題を集め、人々が押しかける展覧会など」を指す。拘束力が弱く、それでいて何かを共有しているような「ヨソオイ」<sup>エ</sup>を提供するような集まりは、「娯楽産業にとっての格好の草刈り場」となるとパウマンは論じる。

このようなコミュニティは、パウマンのみるところでは、「中心に位置するものが何であれ、参加者の間に生まれるきずなが一時的なものであるのみならず、表面的でいい加減な性質をもつ」。それは倫理的責任をともなわず、結果に責任を負わない、その意味で「本当の意味での拘束力をもってはいない」。

パウマンにとって美的コミュニティは「本当の意味」での関係(恋愛にし

る友情にしる)の欠落を埋め合わせるその場しのぎの娯楽商品に過ぎない。だがそれを友情とは別の、肯定的な関係の可能性としてみることもできるのではないか。近代的な友人関係が相互の理解や受容それ自体を求めてきたとするなら、美的コミュニティはさまざまな関心事を仲立ちとして人びとがつながるものである。前者においては関係それ自体が自己目的に求められているのに対して、後者においては関係は共通の関心事の追求のためにある程度は手段としてあつかわれる。前者がなかよくなることそれ自体を目指すとしたら、後者はなかよくなるのとは別の方向性を含んでいる。後者のような関係を天野正子<sup>\*14</sup> にならって「つきあい」と呼んでみることもできよう。つきあいは副産物として友情を生むこともあるかもしれないが、そうならないとしてもつきあいそれ自体が肯定的な質を含んでいるのではないだろうか。例えば、関心事を共有する仲間との協働は、それ自体として楽しく喜ばしいものではないだろうか。

近代の変曲点についてパウマンとは異なつた観点から論じた見田宗介<sup>\*15</sup> は、今後追求されるであろう価値としてアート、愛、友情の三つをしばしばあげている。恋愛のみならず、友情についても「希薄化」が進む局面に今あるのだとしても(あるいはそうであるのだとしたらなおのこと)アート(広い意味での美的コミュニティ)が可能にするつきあいはより意義あるものとして浮かび上がってくるのではないだろうか。

(浅野智彦「若者の友人関係とそのゆくえ」による)

- 1、5、7、9、14、15 いずれも社会学などを専門とする日本の研究者。
- 2 木村直恵『青年』の誕生——明治日本における政治的実践の転換』新曜社、一九九八年、二二八—二二九ページより引用。
- 3 ここでは、両者が不可分であるさま。
- 4 木村直恵『青年』の誕生——明治日本における政治的実践の転換』新曜社、一九九八年、二二九ページより引用。
- 8 ここでは、その人の全体性が像として結ばれるような、内面のある一点を示す語として、比喩的に用いられている。もとは、「平行光線が凹レンズ、凸面鏡などによつて発散させられるとき、発散した光線を逆方向に延長して結ぶ点」のこと。
- 10 原文の注に、「対象は東京都杉並区および神戸市灘区・東灘区に住む一六歳から二九歳の男女である。回答者は住民基本台帳を用いて偏りが生じないように選び出している」とある。
- 11 原文の注に、「ただしここでいう一〇代は一六歳から一九歳のみを含む」とある。
- 12 ポーランド出身の社会学者。一九二五—二〇一七。
- 13 本冊子2ページ下段18行目から、4ページ下段17行目までを指す。

問一 二重傍線部ア、エのカタカナを漢字に直しなさい。

問二 カ く ク にあてはまる適切な語を次の①②から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ①肯定的 ②否定的

問三 ケ にあてはまる人名として最も適切なものを次の①②③④から選び、記号で答えなさい。

- ①橋元良明 ②北田暁大 ③辻大介 ④福重清

問四 傍線部A「直感的透明性としての友人」とはどういうことか、簡潔に説明しなさい。

問五 傍線部B「遠近法それ自体の問い直し」とはどういうことか、本文を踏まえて具体的に説明しなさい。

問六 傍線部C「この見立ては……対応している」とはどういうことか、本文中の語句を用いて説明しなさい。

問七 傍線部D「前者が……含んでいる」について、次の(1)(2)に答えなさい。

(1) 「前者」「後者」はそれぞれ何を指すか、最も適切な語句を本文中から抜き出しなさい。

(2) 「なかよくなる」とは別の方向性を含んでいる」とは具体的にどのようなことをいっていると考えられるか。あなたの経験や身近な事例などを示しながら、分かりやすく述べなさい。



二 次の文章は『浜松中納言物語』の一節である。「」の部分で踏まえて本文を読み後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文の表記を改変した箇所がある。)(30点)

主人公の中納言は、亡き父が唐の皇子に転生していると夢で告げられ、亡父を慕う気持ちが募り、恋しく思う姫君を置いて唐に渡る。唐で皇子の母である后に会って心ひかれ、はからずも契りを交わし、后はひそかに男子(若君)を産む。唐で三年が経ち、中納言は男子を連れて帰国する。

渡り来し<sup>①</sup>ほどは、世に知らずあはれにかなしく、ゆくへ知らぬ波の上に漕ぎ出でしまさまの思ひ、かぎりなしと言ひながら、命だにあらば、三年がうちに、かならず行き帰りなむかし、と思ふ心に、いささ<sup>A</sup>かなくさみにけり。知らぬ世のいくほどの年経ざりしかども、またかへりみるべきやうもなしかし、と思ふに、何の草木も、別るるあはれの世のつねなるべきならぬ中にも、さばかりたくひなき思ひをしめ、心をとどめて、いとけなき<sup>B</sup>かたみばかりを名残に身に添へて、さしも荒き海の上の波よりも、泣き流す涙のよどむ時なきにくらされて、明け暮るるも知らぬやうにて、筑紫におはし着くべきほど近くなりぬ、と聞き給ふ。

この若君は、母君の「今は」と出て離れしあかつきに、泣く泣く抱き寄せ給ひて、「道のほど、乳参らざらむかはりに、この薬をくくめたてまつれ」と添へ給へりし薬のしるしにや、いささ<sup>②</sup>か瘦せおとろへ色も変らず、いよいよ白うつくしげに、光るやうになりまさりつつ、音もつゆも泣かず、あらあらしき男の中にあつかひ聞こゆるに、ものむつかしう、ところせきこともなし。あさましく、変化のもののやうに清らかなるを、かつはゆゆうしうおぼして、かくほかの世に生れたる人と知られては、行くさきこの世にすこし隔たるやう添はむ。のちの聞こえはありとも、なほいかでほかより率て渡りたるとは、人に知られじ、とおぼしまはして、母上の御もとに、「このほど、たひらかにものせさせ給ふにや。とみにまかり帰るべくもはべらざりつれど、いとま申しはべりしほどの過ぎはべらむも、いとおほつかなくて、ありがたうてこそまうで来にたれば、見たてまつらむずるうれしさに、増すことはべらずなむ。さてこまかなるありさまは、今みづから申しはべるべし。中将の乳母、おほつかなさ<sup>\*</sup>に待ちもあへず、さま悪しう来向かふやうに人には思はせて、夜を昼になしてくださせ給へ。京に入りはべらぬさきに、かれにあづくべきものはべるなり。あなかしこあなかしこ、人に知らせさせ給ふな」とて、「さてかの国の人々、送りにまうで来るを、帰りはべるに、めづらしう待ち見はべりぬべからむもの、取り出でさせ給ひて賜はせよ。さやうのこともしたためなむ、京へのほりはべるべき」と書き給ふ。姫君の御方には、かの宰相の君のもとへやり給ふ中にて、言葉おろかならむやは。

D 君によりをちの早船さしはやし風間も待たずこがれ来るかな

と聞こえ給ふ。

京には、「かの国の王にしたてまつらむとて、とどめ給ひければ、え永く帰り給ふまじかんなり」とて、さまざまに言ふを、世の人も惜しみかなしみ聞こえさするに、まいて母上などは、胸、心をくだきておほしなげく折しも、かかる御消息待ち見給ふ御心地の夢のやうにて、よろこび泣きにさへしも、<sup>E</sup>も  
のをおぼえ給はず。

注 \* 母君……唐の后。若君の母。

\* 変化のもの……仮に人の姿になつて現れる神や仏。

\* ほかの世……ほかの国。唐のこと。

\* この世にすこし隔たるやう添はむ……この日本で少し分け隔てるようなことが加わろう。

\* 母上……中納言の母。「このほど」以下は中納言が母に書いた手紙。

\* 中將の乳母……中納言の乳母の名。

\* 夜を昼になしてくださせ給へ……京から、夜も昼も休まずに船の着く筑紫へ下らせてください。

\* あなかしこ……手紙の末尾に「恐れ多い」の意味で用いる。

\* 姫君……中納言が恋しく思う姫君。中納言が唐に渡る前に思いがけず契りを結び、娘を産んでいる。

\* 宰相の君……姫君の側近の女房。

\* 言葉おろかならむやは……言葉がおろそかであるはずがあるうか。

\* をち……遠方。

問一 二重傍線部①・②の助動詞の意味を答えなさい。

問二 波線部ア「給ふ」イ「聞こえ」について、それぞれ誰から誰への敬意を表しているか答えなさい。

問三 傍線部A「いささかなぐさみにけり」とありますが、なぜなぐさめられたのか、簡潔に説明しなさい。

問四 傍線部B「かたみ」とは何を指すか、説明しなさい。

問五 傍線部C「いよいよ白うつつくしげに、光るやうになりまさり」について、次の問いに答えなさい。

(1) 誰がどのようなことになることをあらわしているかを説明しなさい。

(2) なぜそうなったのかを答えなさい。

問六 傍線部Dの歌について、次の問いに答えなさい。

(1) この歌に用いられた掛詞を抜き出し、二つの意味の違いが分かるように説明しなさい。

(2) この歌に込められた気持ちを説明しなさい。

問七 傍線部E「ものをおほえ給はず」に表れた「母上」の気持ちを説明しなさい。

三 次のIの文章は漢の賈誼かぎの伝記であり、IIはその伝記をもとに唐の李商隱りしやういんが書いた詩である。またIIIは宋の嚴有翼げんいうよくが文人の詩を論評するなかで、IIの詩の創意について述べた文章である。賈誼は漢の文帝に仕えた人物であり、他の臣下に妬まれて南方に左遷されたが、後に朝廷に呼び戻された。Iは賈誼が朝廷に呼び戻され、文帝に謁見したときのことを記したものである。I・II・IIIをよく読んで後の問いに答えなさい。(設問の都合上、送り仮名を省略したところがある。)(20点)

I

賈生めサレテ徵見まみユ。孝文帝かうぶんてい方受ケ釐きツ、坐宣室ス。上因リテ感ズルニ鬼神事ノ而問フ鬼神之本ヲ。

賈生因リテ具道ニ所下以然ル之状上。至ニ夜半ニ、文帝前オサム席ヲ。既罷セ、曰ク「吾久シク不見レ賈

生ヲ、自以為ラ過ヘラク之ニ。今不レ及バ也ト。居頃ルコトしばらくシテ之ヲ、拜スツケテ賈生ニ為ス梁懷王リヤウノクワイノウノ太傅ノ。

(『史記』より)

注 賈生……賈誼を指す。

孝文帝……文帝を指す。

釐……祭りのとき神に供えられる肉。祭りが終わったのでこのとき文帝のもとに届けられた。

宣室……宮殿の部屋の名。

上……文帝を指す。

所以然之状……そうである原因のありよう。鬼神に関する神秘的なことがらがなぜそうであるのか、に関する具体的な事情や原因。

前席……しきものを前に進める。賈誼の話に聞き入って彼に近づくさま。

梁懷王太傅……梁の懷王は文帝の子供の一人。太傅は補佐役。

II

賈生

宣室<sup>ニテ</sup> 求<sup>メ</sup> 賢<sup>ヲ</sup> 訪<sup>ナツ</sup> 逐<sup>ニ</sup> 臣<sup>ニ</sup> 賈生<sup>ノ</sup> 才調<sup>更<sup>ニ</sup> 無<sup>シ</sup></sup> 倫<sup>タカヒ</sup>

可<sup>シ</sup> 憐<sup>レム</sup> 夜半<sup>シク</sup> 虛<sup>メ</sup> 前<sup>ヲ</sup> 席<sup>ニ</sup> 不<sup>シテ</sup> 問<sup>ハ</sup> 蒼生<sup>ヲ</sup> 問<sup>フ</sup> 鬼神<sup>ヲ</sup>

(『李義山詩集』より)

注 訪逐臣……左遷された臣下に意見を尋ねる。

才調……才能。

蒼生……民衆。

III

文人<sup>ケルニ</sup> 用<sup>ニ</sup> 故<sup>コト</sup> 事<sup>ヲ</sup> 有<sup>リ</sup> 下<sup>ニ</sup> 直<sup>ニ</sup> 用<sup>スル</sup> 其<sup>ノ</sup> 事<sup>ヲ</sup> 者<sup>上</sup>、 有<sup>リ</sup> 下<sup>ニ</sup> 反<sup>シテ</sup> 其<sup>ノ</sup> 意<sup>ニ</sup> 而<sup>シテ</sup> 用<sup>ル</sup> 之<sup>ヲ</sup> 者<sup>上</sup>。 李義山<sup>ノ</sup> 詩、「可<sup>シ</sup> 憐<sup>レム</sup> 夜半<sup>シク</sup> 虛<sup>メ</sup> 前<sup>ヲ</sup> 席<sup>ニ</sup> 不<sup>シテ</sup> 問<sup>ハ</sup> 蒼生<sup>ヲ</sup> 問<sup>フ</sup> 鬼神<sup>ヲ</sup>」、<sup>③</sup> 雖<sup>シ</sup> 說<sup>ク</sup> 賈<sup>ヲ</sup> 誼<sup>ヲ</sup>、 然<sup>ルニ</sup> 反<sup>シテ</sup> 其<sup>ノ</sup> 意<sup>ニ</sup> 而<sup>シテ</sup> 用<sup>ル</sup> 之<sup>ヲ</sup> 矣<sup>ナリ</sup>。

(『詩人玉屑』に引く『芸苑雌黃』より)

注 其意……その本来の趣旨。

李義山……李商隱のこと。

問一 傍線部①②③の文中における読み方を、送り仮名も含めてすべてひらがなで記しなさい。(仮名遣いは新旧どちらでもよい。)

問二 傍線部Aを送り仮名も含めてすべてひらがなで書き下し文にしなさい。(仮名遣いは新旧どちらでもよい。)

問三 傍線部Bをわかりやすく現代語訳しなさい。

問四 傍線部C「可憐」は残念であるという意味だが、ここでは何が残念だと言っているのか、Ⅱの詩全体を踏まえて答えなさい。

問五 傍線部D「反其意而用之」は、Ⅱの詩における故事の用い方について述べたものである。どのようなことを述べているのか、ⅠとⅡを踏まえて具体的に説明しなさい。